



それぞれの個性を主張した演奏を終え、笑顔で健闘をたたえあう3人のソリスト (左から関本昌平、金子一朗、須藤梨菜。関本の左後ろに指揮者の渡邊一正、須藤の後ろにコンサートマスターの篠崎史紀) ©藤原 翼

注目のソリスト3人による ピアノ協奏曲の「饗宴」

「ピアノ創立40周年記念「ピアノ・コンチエルトの夕べ」



須藤梨菜 ©藤原 翼



関本昌平 ©藤原 翼



全国からピアノ指導者はかりでなく、一般の聴衆も多数来場した ©堀 明久



金子一朗 ©堀 明久

社団法人全日本ピアノ指導者協会（略称ピティナ〔PTNA〕・羽田孜会長）が創立40周年を迎え、それを記念した「ピアノ・コンチエルトの夕べ」が開催された。

社会におけるピアノ指導者の、生涯を通じたピアノの指導法・演奏法の研究を推進し、豊かな人間性の育成を基盤とする音楽教育の振興に努めるとともに、その趣旨をともしする内外の団体と交流を行い、広く文化の発展に寄与すること、また邦人作品の研究と振興を目的に、1966年「東京音楽研究会」の名称で発足、以降着実に発展を遂げ、現在は会員1万一千名を数えるという。

3月28日、サントリーホールで行われたコンサートの共演は、渡邊一正指揮NHK交響楽団。登場したのは、まず須藤梨菜。ヤマハマスタークラスから昭和音大に学び、97年ピティナ・ピアノコンペティションD級金賞、2003年浜松国際ピアノコンクール第4位などを受賞した須藤

は、リストの「ピアノ協奏曲第一番」を演奏、細やかな情感とウィルトゥオーソ的な側面に加え、作品の内面に迫るアプローチで好演した。

続いては現在早稲田中・高で教鞭を執る金子一朗。異色の存在だが、2005年コンペティション特級でグランプリ・聴衆賞を獲得、旺盛な音楽活動を続けている。曲はラヴェル「ピアノ協奏曲ト長調」で、透明度の高いタッチ、特有の詩情を巧みに湧き上がらせた繊細なニュアンスで見事なラヴェルを創出した。

トリはやはり関本昌平。桐朋学園大やパリ・エコール・ノルマルで研鑽を積み、2003年特級グランプリ、及び浜松国際ピアノコンクール第5位、そして昨年のシヨパン国際コンクールで第4位に入賞したことは記憶に新しい。この日はラフマニノフ「ピアノ協奏曲第3番」。圧倒的なテクニック、鋭敏な感性、ロマンティックで進むように情熱的な抒情そして壮大なスケールで鮮やかに弾き切った。

日本のピアノ演奏において、資質の飛躍的な向上と広がりを実感させる演奏会だった。取材：文・真嶋雄大



ステージ経験豊富な3人にとっても、当夜は特別な演奏会だった ©藤原 翼